

# 一九三〇年国会選挙を迎えるナチス党

——バイエルン・オーバーバイエルンの場合——

西 島 映 子

## 一 研究状況

史上最も民主的な憲法を持ったヴァイマル共和国がいわゆる相対的安定期に入ると、国民社会主義ドイツ労働者党（ナチス党）が「合法的」に勢力を伸ばし、共和国を崩壊に追い込んでいく。このナチス大衆運動の研究は様々な角度からなされてきたが、近年、とりわけ地域研究が盛んになってきている。本稿では、<sup>(1)</sup> 時期的には一九三〇年九月の国会選挙の前後を扱うのだが、この国会選挙におけるナチス党の進出も地域によってかなり差があり、ナチス党支持率が全国平均を上回るのはほとんど北部ドイツや東部ドイツの選挙区である。ここでは全国平均をやや下回ったバイエルンを扱うのだが、バイエルンはナチス党の本拠地であり、そこでのナチス運動の実体をみていくことは重要なことであろう。

まず、バイエルン全体に関する研究としては、ヴェルテンベルク大使の報告をまとめたベンツ<sup>(1)</sup>、一九二三年から三三年までを扱ったプリダム<sup>(2)</sup>、権力掌握期に集中したヴィーゼマン<sup>(3)</sup>、バイエルン

警察を対象とするマッギー<sup>(4)</sup>、それに六巻本の『ナチス時代のバイエルン』<sup>(5)</sup>がある。

さらに、バイエルン各地に入ってみると、まず、南部のカトリック地域を扱ったプリダム<sup>(6)</sup>があるが、北部のフランケン地方についての研究が多い。オーバーフランケンを扱ったアシュマルスキ<sup>(7)</sup>、ミッテルフランケンとオーバーフランケンを扱ったハンブレヒト<sup>(8)</sup>、ニュルンベルクを扱ったモールツィーグラ<sup>(9)</sup>、それにシヨワルター<sup>(10)</sup>、ヴェニンガーライヒター<sup>(11)</sup>がある。また、ニーダーバイエルンについては、ハンブレヒトやシュナイダー<sup>(12)</sup>のものがあ

る。さて、本稿では、まだ研究のないオーバーバイエルンを対象とする。ここはバイエルンの首都ミュンヘンがあり、ナチス党員に、「伝統ある管区」と呼ばれていた。この際、オーバーバイエルン各地方当局のミュンヘン中央省庁に対する『半月間報告』<sup>(14)</sup>の分析を中心とする。

## 二 ナチス党の活動状況

一九三〇年はすでに経済的社会的不安が高まりつつあった。一月二十日付の報告<sup>(15)</sup>で特に失業率の増大が強調されており、続く報告<sup>(16)</sup>では数々の「緊迫した」失業者集会が記録されている。失業者のデモについてもいくつか報告され、失業率増大は公共秩序の維持を非常に困難にすると、当局によっても指摘されている。この報告ではさらに、大不況、失業率の増大、農業不振など内政の不安と共に、賠償問題等、外交における「国民の不安」もすでに頂点に達しかけていることが記されているのである。四月二十二日付報告<sup>(17)</sup>では、ミュンヘン市議会による、ミュンヘン以外の労働者のミュンヘンでの労働禁止の決議が、失業者や共産党の行動を過激にしたとされている。

こうした社会状況の中で、ナチス党の活動は三〇年初頭から、諸政党の中で最も活発であった。ナチス党は共産主義者と共同で失業者に働きかけたり、市議会でも「扇動的な方法」で活動する<sup>(18)</sup>など、集会の数の圧倒的な多さに加えて日常的活動においても他党に比べ、注目されているのである。共産党や農民同盟の動きも活発であるが、ナチス党は特に「ヒトラー・ロイテ」が制服を着用してトラックで集会にやって来たり、集会ホールの警備を引き受けるなど<sup>(19)</sup>、制服を着用した行動が目立っている。他にも、映画上映、戦没者記念式典や定期的な楽隊付制服行進、貨物自動車や自転車によるデモ、夏にかけては、夏至祭での行進とビラ配布、ヨーゼフシュタールの森での青年キャンプと制服行進など多

様な活動形態が見られる<sup>(20)</sup>。六月に制服禁止令が出された後も、表向き「合法」路線を取り、当局を刺激することを恐れていたナチス党指導者達は宣伝活動に支障を来すにしても全体的には禁止令を遵守していたようであるが、しかし、禁止令の及ばぬ州境で制服を着換えたり、ハーケンクロイツの腕章や旗を使用する<sup>(21)</sup>など、抜け道を探っていたようである。七月四日付の報告<sup>(22)</sup>では、制服禁止が農民層では歓迎されたとの報告もあり、こうした活動スタイルがすべての社会層にアピールしたとは言えないようだ。

地域的に見ると、三月中の報告では、ミュンヘン、シュタルンベルク、それに加えてガルミッシュ・パルテンキルヒェン<sup>(23)</sup>、五月六日付の報告<sup>(24)</sup>ではミュンヘン周辺での激しい宣伝活動、また九月三日付の報告<sup>(25)</sup>ではホルツキルヒェンとその周辺は「純然たる国民社会主義色」であることが述べられ、ランツベルクのすべての地区で集会が行われたことも報告されており、ナチス党の活動はミュンヘン以下、地方の中心的都市におけるものであることがわかる。

## 三 宣伝内容

次に、その宣伝内容をみてゆくことにするが、これを統一的に理解することは難しい。たとえばこの時期の共産党のスローガンは、「七時間労働の獲得と賃金と社会補助金の値上げ、及び、生産過程への失業者の編入増加のための闘争、資本主義の合理化とトラストのブルジョアジーの貪欲な政策と勤労住民への新しい税負担に対する闘争、そして社会ファシズムの支配政策による一〇

○万勤労者の一層の貧困化に対する積極的な闘争<sup>(26)</sup>と集約できる。これに対してナチス党には報告でみる限り、「民族共同体」といった統一的スローガンはみられない。

まず、二月十八日付の報告<sup>(27)</sup>では、「ドイツの救済としての国民社会主義」というテーマの演説が行われ、他の集会ではナチス党の政治的・経済的目的が述べられたことが記されている。さらに、三月と五月の報告では、集会で「党綱領」が説明されたことが記されている<sup>(28)</sup>。

さらにいくつかの集会をみると、二月十八日付報告ではハイネス中尉が、「何故私は一五年の懲役刑を受けたか」というテーマで演説し、また、「失敗した人民投票」について述べられ、三月五日付報告<sup>(30)</sup>では、「ベールを被った国家の欺瞞について」演説がなされ、六月二十日付報告<sup>(31)</sup>では、バイエルン州政府に対し、「もし我々の運動の勝利の後に革命裁判所が設置されたならその時、我々はあなた方にこの借りを返すだろう。我々はあなた方を忘れないことを覚えておくがいい」と述べられたことが報告されている。さらに、七月四日付と九月三日付の報告では、ナチスが州首相ヘルトを攻撃し、また、ヒトラークーゲントのキャンプと制服行進への当局の干渉を非難したことが記され、ナチス党の反共和国の姿勢が窺える<sup>(32)</sup>。

また、シュトラッサーの「株式独裁と一九三二年のドイツの金融経済の崩壊」についての演説、社会民主党、バイエルン人民党攻撃、「ドーズ案とヤング案」、「あらゆる職業の生産的生存競争」、「ドイツ民族の死の舞踏」、「すべての生産的ドイツ人の不当な搾

取の前で」、「百貨店と消費組合は中産階級の不倶戴天の敵」、「税金と経済のポリシェヴィズム」などのテーマの演説<sup>(33)</sup>、時には社会主義者との協力もしたこと、などをみるとナチス党は「場合場合において、ナショナルなプログラムもしくは社会主義的なプログラムを強調した」という四月二十二日付の報告<sup>(35)</sup>が納得されるし、一貫したテーマというよりはあらゆる階層から支持者を獲得しようとしたことが窺える宣伝内容と言えるだろう。

ただ農業国ということで農民へのアピールも強い。三月七日に発表された党の「農業綱領」<sup>(36)</sup>については、しばしば説明されている。二八年以来ナチス党は、有権者の六〇%が農民であるバイエルンでは、農民を獲得することが重要であると気付いていた。そのためバイエルン農民同盟の地盤に乗り込んで農民にアピールしようとしており、三〇年初頭から農民向けの宣伝が強化された。演説のテーマを挙げると、「農民の困窮と税負担」、「農民の困窮と民族の死」、「ナチズムと農民」、「税金苦と農業」、「農民の困窮と民族の困窮」、「岐路に立つ農民」<sup>(37)</sup>などが報告されている。また、五月二十五日の集会では、「選挙が近い。ナチス党が勝利し農民にはより良い時代が来るだろう」と宣伝がなされ、八月二十七日の集会では、「もしナチスが政権にいたら、農民は少くとも二年間は税金を払う必要がなく、それによって彼らは再び立ち直るだろう」とエッパ将軍が述べ、嵐のような拍手を得ている<sup>(39)</sup>。そして、また、ナチスは、「大麦とホップ」を外国から買っているビール会社の監査委員を務めているバイエルン人民党のシュリッテンバウアーを攻撃した<sup>(40)</sup>。さらに、自分は「外国製品」を取り

寄せていながら消費者にはデンマークのチーズとオランダのバターを買わないようにとのラジオ演説をした農業大臣も強く非難されている。<sup>(41)</sup>

さらに、バイエルンの特性についてのアピールもある。たとえば、「第一次大戦時のドイツ軍のベルギーにおける残虐行為は、プロイセンとザクセンのプロテスタントの軍隊によってなされたのであり、バイエルンは関係ない」という五月六日付報告<sup>(42)</sup>に見られる牧師の演説は、カトリックの多いバイエルン向けの反プロイセン的宣伝と思われる。バイエルン人民党などからその反カトリック性を攻撃されていたナチス党も、イデオロギーとして宗教を否定するよりむしろ、宗教も支持者獲得に利用した、と感じられるのである。また、外交面では、ムッソリーニに対する同調、ナチス政府になったら伊・英と同盟を結ぶこと、が強調されている。<sup>(43)</sup>

最後に、反ユダヤ主義問題について見てみると、四月二十二日付の報告<sup>(44)</sup>では、「ユダヤ人達をモはや農地に入れないこと」<sup>(45)</sup>を要する農民が農場経営者達に要求したこと、七月四日付の報告<sup>(46)</sup>では、「何故ユダヤ人も働くことを要求しないのか、何故それを要求しない党の下にとどまっているのか。ユダヤ人だけが働かずに食べるべきであろうか。誰のパン割り当量が共和国では多いか、労働者のか、それともユダヤ人のか。共和国では誰の子供が飢えているのか、労働者のか、それともユダヤ人のか。」と書かれたビラ<sup>(46)</sup>が配られたことが記されている。また、二月十八日付報告<sup>(46)</sup>では、集会で「いつものように」ユダヤ人攻撃がなされた、と表現されていることから、ナチス党の反ユダヤ主義が認められるが、しか

し、それによってナチス党が伸張したと言えるほどにはこの報告では重視されていない。

#### 四 支持層

三月五日付の報告<sup>(47)</sup>では、ナチスは「住民のすべての層から支持者を獲得しようとしている」とあり、四月二十二日付の報告<sup>(48)</sup>でも「すべての住民層を党の目的のために獲得しようとしており」、その場に応じてナショナルなプログラムと社会主義的なプログラムを使い分けたことが報告されている。四月四日付の報告<sup>(49)</sup>では、「国民社会主義者の大量の集会が雪崩のように引き続いて行われた」とあり、あらゆる所で激しい宣伝が行われたことがわかり、五月十九日付の報告<sup>(50)</sup>では、支持者が絶えず増加しているので選挙の折には他党の犠牲の上にナチス党が進出するであろうというミースバハ郡当局の予言と、その運動の急上昇はバイエルン人民党をも圧迫しているという意見まで見られる。グラーツィンクの集会の際には集まった人々が入りきらずに平行集会が行われ、アドルフ・ヒトラーが演説し、四、〇〇〇人が参加した。<sup>(51)</sup>

しかし、はたしてナチス党はあらゆる社会層から党員や支持者を得ることができたのであろうか。報告に見る限り、党は必ずしもすべての社会層から支持者を得ていたとは言いがたい。この期の報告に現われた集会の弁士等の職業を註記抜きでピックアップすると、仕立屋親方、家主（複数）、小商人、パン屋、地区獣医、印刷所所有者、ガラス職人親方、「農民」はなく「農業家」（複数）、弁護士、森林監督官（二名）、大学教授、国有鉄道上級書

記、市上級書記、市議会議員（複数）、衛生評議員（二名）、教師（二名）、上級教師（二名）、牧師、郵便局書記、簿記係、測量助手、税務所官吏、商業学校長、州議会議員で、他には、大学生（二名）中尉、少佐、将軍があり、労働者は四月二十二日付報告で登場する「機械労働者」のみである。従って新中間層の比重がこの報告をみる限りでは大きく、その宣伝にも拘らず「農民」は少く、都市住民の支持が大きかったと言えよう。<sup>(53)</sup>

## 五 他政党との確執

他政党との関係を見ると、最も多く衝突しているのが共産党である。三月五日付の報告から共産党との「暴力沙汰」がはじめている。この頃にはナチス党も失業者集会などに力を入れたしているのだが、このような活動は当然共産党と現場で衝突することになるだろう。四月二十二日付報告ではナチス党の「組織的直接的な他政党への攻撃」が明らかにされている。五月六日付の報告では、農業不振のため農業に希望の持てなくなった農民の末子を共産党が獲得しようと試みていることが報告されており、共産党とナチス党の対立も増大する。両党はお互いの集会を妨害し合い、しばしば暴力沙汰を避けるためには警官の介入が必要となった。<sup>(57)</sup> 六月三日付の報告でも、共産党が地方で様々な活動をしているが、ナチス党の募集活動も増大しているので両者が衝突する危険があることが懸念されている。共産党はメーデーの頃に、「ハーケンクロイツは労働者の死である」<sup>(58)</sup>、「ファシストの頭目ロートを倒せ」と壁や道路に落書きしており、社会民主党と共に共産党は

ナチスを「ファシスト」と呼んでいることが注目される。七月四日付報告では共産党との対立が激しくなっていることが特記され、選挙活動中にも、集会妨害など様々な衝突が報告されている。しかし、元共産党員がナチス党へ移行した例も報告されており注目に価する。<sup>(60)</sup>

次に、社会民主党とナチス党が対立したことも多く報告されている。四月二十二日付の報告では、社会民主党はナチスを「国家の敵」と攻撃し、実業家の中にナチス党員がいることを労働者にアピールし、注意するよう呼び掛け、また、ナチス党や共産党の共和国攻撃に対して、ヤング案、大統領、社会民主党の社会政策と共和国保護法を擁護している。

さらに保守政党との関係であるが、ナチス党はバイエルン人民党とも激しく対立していることは注目に価する。六月二十日付の報告ではバイエルン人民党の集会にナチスが出席し、「我々の勝利の後に借りを返す」と脅し、六月二十五日のコルバーモールのナチス党の集会は、ナチスに「たった五分の演説」しか認めず、ナチスを「ヴォータンの子供達」「偽キリスト教徒」と嘲笑したバイエルン人民党の集会に対抗するためのものであり、バイエルン人民党は侮辱され、特にバイエルン政府の首相と内相が攻撃された。<sup>(63)</sup> 他の集会でも首相は非難されているが、バイエルン人民党は政府与党であり、また根強いカトリック住民の支持を得ていたので宗教問題でもナチスと摩擦があり、バイエルンにおけるナチス党の進出にとって大きな障害となっていたと思われる。ナチス党がバイエルン人民党の支持者を奪い、バイエルンで進出するた

めにも、この党への攻撃は激しくなったと想像できる。

農民へのアピールからしてナチス党はバイエルン農民同盟とも衝突している。二月四日付の報告<sup>(65)</sup>からすでに農民同盟との対立が見られるのである。集会妨害も度々報告されている。六月二十日付の報告<sup>(66)</sup>によると、ナチス党は、農産物の保護関税に関する国会での投票の際、共産党や社会民主党と共に反対の投票をしたことを非難され、さらに農民同盟のメンバーに棄権するよう一、〇〇〇マルクを提供したことを攻撃され、論争になっている。九月十七日付の報告<sup>(67)</sup>では、選挙直前で警官の監視が強化されていたにも拘らず、農民同盟の集会でナチスとの暴力沙汰が起り負傷者がでたことが記されている。また、国家人民党系の全国農村同盟支配下の農民団体の統一戦線である「緑色戦線」も攻撃されたことが報告されている<sup>(68)</sup>。

最後に、選挙活動に触れると、国会選挙告示直後、「国民は国会選挙には比較的関心が薄く生活物資の供給の方が関心を引いている」ことが指摘され、選挙集会自身からも「特別なこと」は報告されていない<sup>(69)</sup>。しかし当然選挙直前には選挙運動の活発さが強調されている<sup>(70)</sup>。だがこれまでみたようにナチス党の活発な活動は選挙戦に入るずっと以前からのものであり、選挙キャンペーンで突然浮かび上がってきたのではない。選挙集会で主張されたテーマもそれ以前から述べられていたものが多い。ナチス党はすでに選挙以前から、国民の現状への不満や不安を吸収し組織し、あらゆる階層から支持者を獲得することを目差していたようである。このように見てくると、ナチス党はあくまで、「下から」の大量

運動として台頭してきたと言える。全国的レベルでの総括は次の機会にしたい。

#### 註

- (1) W. Benz (Hrsg.), *Politik in Bayern 1919-1933. Berichte des württembergischen Gesandten Carl Moser von Filseck*, Stuttgart, 1971.
- (2) G. Pridham, *Hitler's Rise to Power: The Nazi Movement in Bavaria 1923-33*, London, 1973 (垂水節子／豊永泰子訳『ヒトラー権力への道・ナチズムとバイエルン一九二二—一九三三年』時事通信社、一九七五)。
- (3) F. Wiesemann, *Die Vorgeschichte der nationalsozialistischen Machtübernahme in Bayern 1932/1933*, Berlin, 1975.
- (4) J. H. I. McGee, *The Political Police in Bavaria, 1919-1936*, Diss., Univ. of Florida, 1980.
- (5) *Bayern in der NS-Zeit, I-VI*, München/Wien, 1979-1983. Ⅴの他ナチス時代について N. Frei, *Nationalsozialistische Eroberung der Provinzpresse: Gleichschaltung, Selbstanpassung und Resistenz in Bayern*, Stuttgart, 1980; I. Kershaw, *Popular Opinion and Political Dissent in the Third Reich: Bavaria 1933-45*, Oxford, 1983.
- (6) G. Pridham, *The National Socialist Party in Southern Bavaria 1925-1933: A study of its development in a predominantly roman catholic area*, Diss., London, 1969.

- (7) L. Asmalky, *Der Nationalsozialismus und die NSDAP in Coburg 1922-1933*, Coburg, 1969 (Masch. Zulasungsarbeit).
- (8) R. Hambrecht, *Der Aufstieg der NSDAP in Mittel- und Oberfranken (1925-1933)*, Nürnberg, 1976.
- (9) M. Moor-Ziegler, *The Socio-Economic and Demographic Bases of Political Behavior in Nuremberg during the Weimar Republic, 1919-1933*, Diss., Univ. of Virginia, 1976.
- (10) D. E. Showalter, *Little Man, What Now? Der Stürmer in the Weimar Republic*, Hamden, 1982.
- (11) M. Weninger-Richter, *The National Socialist Electoral Breakthrough: Opportunities and Limits in the Weimar Party System. A Regional Case Study of Franconia*, Diss., Univ. of New York, 1982.
- (12) R. Hambrecht, *Nationalsozialistische Propaganda—dargestellt vom Beispiel Niederbayern—*, in: *Beilage zum Amtlichen Schul-Anzeiger für den Regierungsbezirk Niederbayern*, Nr. 3 v. 1. Juni 1980, 1-24.
- (13) R. Schneider, *Die Politischen Strömungen in Landshut von 1928-1933*, in: *Verhandlungen des Historischen Vereins für Niederbayern* 106 (1980), 23-85.
- (14) Halbmögensbericht des Regierungs-Präsidiums von Oberbayern vom Januar 1930 bis Oktober 1930: Bayerisches
- Hauptstaatsarchiv München, Abteilung II, Minn 73720.  
(21) HRO v. 20. Januar 1930, Bl. 1.  
(22) HRO v. 4. Februar 1930, Bl. 1-3.  
(23) HRO v. 22. April 1930, Bl. 5.  
(24) HRO v. 20. Januar 1930, Bl. 1-2.  
(25) HRO v. 18. Februar 1930, Bl. 4.  
(26) HRO v. 20. März 1930, Bl. 7; HRO v. 22. April 1930, Bl. 2-3; HRO v. 4. Juli 1930, Bl. 3; HRO v. 19. August 1930, Bl. 1-2.  
(27) HRO v. 4. Juli 1930, Bl. 3; HRO v. 5. August 1930, Bl. 1-2.  
(28) HRO v. 4. Juli 1930, Bl. 4.  
(29) HRO v. 5. März 1930, Bl. 1; HRO v. 20. März 1930, Bl. 6.  
(30) HRO v. 6. Mai 1930, Bl. 1.  
(31) HRO v. 3. September 1930, Bl. 2.  
(32) HRO v. 20. März 1930, Bl. 5.  
(33) HRO v. 18. Februar 1930, Bl. 4.  
(34) HRO v. 5. März 1930, Bl. 1; HRO v. 6. Mai 1930, Bl. 2.  
(35) HRO v. 18. Februar 1930, Bl. 4.  
(36) HRO v. 5. März 1930, Bl. 1.  
(37) HRO v. 20. Juni 1930, Bl. 1.

- (32) HRO v. 4. Juli 1930, Bl. 2; HRO v. 3. September 1930, Bl. 1-2.
- (33) HRO v. 18. Februar 1930, Bl. 4; HRO v. 5. März 1930, Bl. 1.; HRO v. 4. April 1930, Bl. 1.
- (34) *Ibid.*, Bl. 2.
- (35) HRO v. 22. April 1930, Bl. 1.
- (36) 参照‘伊集院立」一九三〇年のナチスの農業政策とヴァンター・ダレー」『茨城大学教養部紀要』一七（一九八五）。
- (37) HRO v. 5. März 1930, Bl. 1; HRO v. 20. März 1930, Bl. 6-7; HRO v. 22. April 1930, Bl. 3; HRO v. 3. Juni 1930, Bl. 1; HRO v. 20. Juni 1930, Bl. 1.
- (38) HRO v. 3. Juni 1930, Bl. 1.
- (39) HRO v. 3. September 1930, Bl. 2.
- (40) HRO v. 3. Juni 1930, Bl. 1.
- (41) HRO v. 4. Juli 1930, Bl. 2.
- (42) HRO v. 6. Mai 1930, Bl. 2.
- (43) HRO v. 22. April 1930, Bl. 3; HRO v. 6. Mai 1930, Bl. 1.
- (44) HRO v. 22. April 1930, Bl. 3.
- (45) HRO v. 4. Juli 1930, Bl. 3.
- (46) HRO v. 18. Februar 1930, Bl. 4.
- (47) HRO v. 5. März 1930, Bl. 1.
- (48) HRO v. 22. April 1930, Bl. 1.
- (49) HRO v. 4. April 1930, Bl. 1.
- (50) HRO v. 19. Mai 1930, Bl. 4.
- (51) HRO v. 19. August 1930, Bl. 1.
- (52) HRO v. 22. April 1930, Bl. 2.
- (53) *たぐやぎ*‘Hambrecht, *Der Aufstieg der NSDAP*, 304 ff. だが「労働党」の比率が比較的に高い。
- (54) HRO v. 5. März 1930, Bl. 2.
- (55) HRO v. 22. April 1930, Bl. 1.
- (56) HRO v. 6. Mai 1930, Bl. 2.
- (57) HRO v. 3. Juni 1930, Bl. 1-2.
- (58) *Ibid.*, Bl. 2-3.
- (59) HRO v. 4. Juli 1930, Bl. 1-2.
- (60) HRO v. 22. April 1930, Bl. 3.
- (61) *Ibid.*, Bl. 4.
- (62) HRO v. 20. Juni 1930, Bl. 1.
- (63) HRO v. 4. Juli 1930, Bl. 1.
- (64) *Ibid.*, Bl. 2.
- (65) HRO v. 4. Februar 1930, Bl. 3-4.
- (66) HRO v. 20. Juni 1930, Bl. 1-2.
- (67) HRO v. 17. September 1930, Bl. 1-2.
- (68) HRO v. 19. Mai 1930, Bl. 4. 参照‘豊永泰子「緑色戦線とヴァンタール共和制期の農業政策」『史料』五七（一一）（一九七四）。
- (69) HRO v. 5. August 1930, Bl. 1.
- (70) HRO v. 17. September 1930, Bl. 1.